

<特集：IFLA LRM 読解シリーズ>

## IFLA LRM の訳語をめぐる問題

和中 幹雄

日本図書館研究会情報組織化研究グループの主催により、IFLA Library Reference Model (IFLA LRM) の邦訳版<sup>1)</sup>を教材にして、2020年7月11日から2021年1月31日まで7回にわたって勉強会(輪読会)が開催された。その第1回の前半部分(「訳者まえがき」p. v-vi)を訳者代表の一人として筆者が担当し、IFLA LRM の概念モデルとしての概要を紹介するとともに、邦訳版作成の際の「訳語」の問題を報告した。

IFLA LRM は、書誌データを対象とする FRBR (Functional requirements for bibliographic records)、典拠データを対象とする FRAD (Functional requirements for authority data)、主題典拠データを対象とする FRSAD (Functional requirements for subject authority data) という三つの概念モデルを統合して策定された、書誌情報に関わる新たな概念モデルであり、FRBR を継承するモデルであるという、概念モデルの特徴と成り立ちについての問題にはここでは触れず、「動向レビュー IFLA Library Reference Model の概要」『カレントアウェアネス』No.335 (2018/3/20) 等に譲りたい。ここでは、後者の邦訳版作成に際しての「訳語」の問題についてのみ言及する。

### 1. 日本語訳の必要性和翻訳体制

情報技術の観点から見ると、実体関連分析に基づく概念モデルのような技術的な文献は、その応用において、英語による原文の方が適切である場合が多いと考えられる。そのため、翻訳に取り掛かることには当初かなり躊躇したが、「図書館関係者が概念モデルの意味内容を十分に理解するためには、やはり何らかの形での邦訳が必要」という判断に至った。また「少人数による翻訳作業は効率的ではあるが、共通理解のためには、わが国におけるこの分野の研究者をできるだけ多く募って翻訳を実施することが望ましい」と考え、15名による共同訳のチームを構成した。そのため、文体や訳語の統一が重要な課題となり、訳語決定の方針を共有しながら翻訳作業を進めざるを得なかった。この方針は邦訳版に反映されているので、それらのなかで重要な点のいくつかを具体的に紹介したい。

### 2. 訳語決定の方針

専門分野の技術的文献の翻訳は、専門用語をどのように翻訳するかが最も重要な課題となる。この点については、① 斯界の慣習を重視する、② 直近の訳語を重視する、③ 一般的な語を優先する、の3点を基本方針とした。この方針は、2004年に刊行された FRBR の邦訳版<sup>2)</sup>における方針を引き継ぐものである。

FRBR においても IFLA LRM においても、専門用語は、伝統的な書誌学および目録作成技術の用語と概念モデル化の用語に大別される。「① 斯界の慣習を重視する」とは、図書館

学と情報学のコミュニティにおける慣習に従うことを意味している。

「② 直近の訳語を重視する」とは、直接的には IFLA LRM の先行モデルである FRBR 邦訳版の訳語を踏襲したことを指している。FRBR 邦訳版では、伝統的な書誌学および目録作成技術にかかわる用語は、『英米目録規則 第2版日本語版』（1982年 日本図書館協会刊）の訳語をベースとしていた。この伝で行くと、FRBR に登場しない目録作成技術に関わる用語については、AACR2 の後継規則である RDA の邦訳に基づくこととなる。しかし、RDA の邦訳がまだ存在しないため、FRBR を基礎とし RDA の翻案とも言える目録規則である『日本目録規則 2018年版』（以下 NCR2018）に依拠することとが妥当であると考えた。この他に 2004 年以降に翻訳された FRAD、FRSAD、ICP (Statement of International Cataloguing Principles) の邦訳<sup>3)</sup>も参考にしている。

FRBR 等の邦訳には登場せず、定訳がまだない用語については、英語音のカタカナ表記はできるだけ避け、用語の意味内容を表す日本語（主に漢語）を用いることに努めるといふ、やはり FRBR 邦訳の方針を継承した。例えば、FRBR 邦訳で *item* を「アイテム」でなく「個別資料」と訳したように。この種の例で重要な用語としては *Resource* がある。

*Resource* は、ICP の国立国会図書館 (NDL) 訳や NCR2018 では「資料」と訳されている。しかしながら、IFLA LRM では *Resource* は「モデルで定義する全実体のインスタンス」と定義されているので、全実体には、「資料」のカテゴリに入る「著作」「表現形」「体現形」「個別資料」だけではなく、「資料」の創造や実現に責任をもつ「個人」や「団体」なども含まれるので、「資料」と訳すことは適当ではないと考え、新たな訳語を導入することとした。この場合、英語音のカタカナ表記が多用されているモデル化ないし情報技術関連用語の慣行を重視すると、「リソース」とすべきであるが、用語の意味内容を表す日本語（主に漢語）を重視する観点から、「情報資源」という訳語を選択した。また、その下位概念の *bibliographic resource* は NDL 訳に従い「書誌的資源」とするが、*library resource* は「図書館情報資源」（ICP の NDL 訳では「図書館資料」）とした。さらに、物的なものに限定される *physical resource* は「物的資料」と訳し分けた。

FRBR 邦訳をあえて変更した重要な用語に *Aggregate* がある。FRBR で「集合的実体」と訳されていたが、IFLA LRM においては体現形にのみ適用されるように変更されたため、意識して「集合体現形」に変更した。

英語音のカタカナ表記はできるだけ避けたが、情報技術関連用語については、「② 斯界の慣習を重視する」という方針に従い、英語音のカタカナ表記を採用した場合もある。例えば、*Instance*→インスタンス（×特定例）、*Property*→プロパティ（×特性）、*Path*→パス（×径路）などがそれである。

### 3. 実体名と関連名の訳語について

IFLA LRM では、11 個の「実体」(Entity) と 5 個の利用者タスク (User task) が定義されているので、それらの訳語を見てゆきたい。

利用者の関心対象は「実体」と呼ばれ、表 1 のように、11 種類の階層的なクラスとして定義されているのが IFLA LRM の特徴である。

表 1 階層的に位置づけられた 11 個の実体の原語と訳語  
(各欄の上段が原語、下段が訳語を示す)

| トップレベルの実体  | 第二レベルの実体             | 第三レベルの実体                    |
|------------|----------------------|-----------------------------|
| Res<br>res |                      |                             |
|            | Work<br>著作           |                             |
|            | Expression<br>表現形    |                             |
|            | Manifestation<br>体現形 |                             |
|            | Item<br>個別資料         |                             |
|            | Agent<br>行為主体        |                             |
|            |                      | Person<br>個人                |
|            |                      | Collective Agent<br>集合的行為主体 |
|            | Nomen<br>nomen       |                             |
|            | Place<br>場所          |                             |
|            | Time-span<br>時間間隔    |                             |

最上位の実体 Res は下位のすべての実体を包含するスーパークラスとして定義されている。Res は Resource の略ではなく、英語の Thing に相当するラテン語である。「対象領域における任意の実体」と定義され、「物質的なまたは物理的なものおよび概念の双方」を含

み、「対象領域である書誌的宇宙に関係するとみなされるすべてが含まれる」とされている。適当な日本語が見いだせず、ラテン語の原語 **res** をそのまま用いることにした。勉強会において、「森羅万象」と訳すことができるのではないかという意見が出た。この「森羅万象」とは言っても、書誌的な世界での話であり、それらを名付ける名称や記号も含まれている点に注意が必要である。**Res** と同様に、適当な日本語が見いだせず、英語音のカタカナ表記ではなく、アルファベット表記をそのまま用いることとした実体名が、実体の名称や記号である **Nomen** である。この **Nomen** は、実体の属性ではなく、実体そのものとして定義されている。

**Nomen** は英語の **name** に相当するラテン語である。関連する語として、**Name**、**Appellation**、**Designation** といった英語が本文中で使用されている。**FRAD** では、**Nomen** に相当する実体名は **Name** という用語が使用されていて、**NDL** 訳は「名称」であった。今回も、それを踏襲して「名称」という訳をあてることも考えられたが、**FRAD** から **IFLA LRM** への展開の中で、原作者があえてラテン語名を当てたのには、それなりの理由がある。**Nomen** は、タイトルや著者名や件名などとともに、分類記号や識別子をも含む概念であるからである。この語は、ソシール言語学におけるシニフィアン＝記号表現＝能記に近い概念と理解することができるが、この語を充てることは難しく、適当な日本語がないので、原綴のままとするしかないのではないかと考えた。**Res** や **Nomen** は、原文では、**Res**、**RES**、**res**、**Nomen**、**NOMEN**、**nomen** のように大文字小文字表記さまざまであるので、訳語では **res**、**nomen** のように、小文字で統一した。

**FRBR** において第一グループの実体とされた **Work**、**Expression**、**Manifestation**、**Item** は、**IFLA LRM** でも概念モデルの基本コンセプトとして変更がないので、それぞれ **FRBR** 邦訳における「著作」「表現形」「体现形」「個別資料」をそのまま踏襲した。

**FRBR** において第二グループの実体とされた **Person** と **Corporate body** には変化があった。これらの実体を包括する上位概念として、**Agent** という実体が新たに導入されたからである。**Agent** は、「意図的な行為ができ、権利を付与されることができ、およびその行為に対して責任を負うことができる実体」と定義されているので、「英語音のカタカナ表記はできるだけ避け、用語の意味内容を表す日本語（主に漢語）を用いることに努めるという方針」に基づき、「エージェント」ではなく、「行為主体」とした。

**Person** は旧来の目録法で使用されている「個人」をそのまま踏襲したが、**Corporate body**（団体）は **IFLA LRM** においては、「団体」を拡張した概念 **Collective Agent** に変更された。**Collective Agent** とは、「特定の名称をもち、1つの単位として活動できる個人の集まりまたは組織」と定義されている。「団体」のみならず、臨時のグループ、会議、探検隊、展示会、祭り、フェアなども含まれる。さらに「藤子不二雄」「エラリー・クイーン」「ニコラ・ブルバキ」のような共同筆名または集合筆名もこの **Collective Agent** に含まれる（この共同筆名はこれまでの目録法では個人名とされてきたものであるが）。**Collective Agent** は「集合的行為主体」と訳した。

Place は FRBR においては、Concept、Object、Event とともに、「著作の主題として役立つ付加的な実体の集合である」第3グループの実体の一つとして定義されていた用語と同一である。しかし IFLA LRM では、FRBR のような「著作の主題として役立つ」という限定がはずされている点で、Time-span と同様に新規の実体と言える。

Place は、「空間の一定の範囲」として定義されている。著作の主題に限定されないが、書誌的文脈では「文化的な構成物」に限定される。地球外の場所も含まれる一方、「想像上や伝説上、または架空の場所」は除かれているように、GPS などで表現できることが想定されているのであろう。訳語は FRBR を踏襲して「場所」とした。

Time-span は、「開始と終了とを特定することによって識別できる期間のことである。結果として得られる期間は、その期間内に生じた行動や現象と結びつけられ得る。極めて正確な時間でさえ測定し得る期間を有する」と、その適用範囲が示されている。当初、「時間」という簡便な訳語を用いていたが、「開始、終了、および期間を有する時間の範囲」という定義から、「開始と終了のある期間」や「時間の範囲」の意味を重視し再考することとした。訳語候補として、「日本語シソーラス連想類語辞典」を参考にしたりして、漢語では、「時間範囲」「時間枠」「持続時間」「継続時間」「時-間」などを考えた。また、英語音のカタカナ表記はできるだけ避けるという原則を破って、「タイムスパン」を採用することも考えたが、情報工学やその他の科学技術研究において、同種の意味で「タイムスパン」という日常語(外来語)は使用されず、「時間間隔」が使用されていることを知ったので、この「時間間隔」を採用することとした。書誌的世界において「時間間隔」が重要な要素となるものに「逐次刊行物」がある。

関連名は、原文では、名詞ではなく文型で示されている(例えば、主題関連を *has as subject* あるいは *is subject of* などと表現するように)。これは、主語、述語、目的語の3つのエレメントで情報資源間の関連を表現する RDF というメタデータ・モデルに基づくものであろう。日本語にやや馴染みにくい英語文型に基づくものなので、次のような二重の訳文を採用した。

(原文) WORK was created by AGENT

(訳文) 著作 一創造された (was created by) → 行為主体

(著作は行為主体によって創造された)

#### 4. 利用者タスクの訳語について

FRBR では、利用者が行うタスク(作業、行動)を一般化し、4つの類型 *find* (発見)、*identify* (識別)、*select* (選択)、*obtain* (入手) に分けてそれぞれを定義している。

IFLA LRM では、これらの4つの利用者タスクに *explore* が加わって5つの利用者タスクとなった。*explore* は、「情報資源間の関連や情報資源の文脈的な位置を用いて、情報資源を発見すること」と定義されている。文脈的情報やナビゲーション機能による「発見の支援」である。FRAD の *contextualize* (関連の明確化) や FRSAD の *explore* (主題探索) (*explore*)

は、新たに定義されたこのタスクに統合されている。

explore は、ICP の NDL 訳を参考にして、「探索」を訳語とした。

### 6.5 to navigate and explore

within a catalogue, through the logical arrangement of bibliographic and authority data and the clear presentation of relationships among entities beyond the catalogue, to other catalogues and in non-library contexts.

### 6.5 誘導および探索

書誌データおよび典拠データの論理的な排列、ならびに、実体相互の関連の明確な表示によって、目録の中を誘導および探索すること。

explore の類語として、search や seek も使用されているので、それらの整理が必要であった。search は、explore (探索) の定義中に登場するので、その場合の search は「検索」の語を使用した。formulating bibliographic searches (書誌的探索の定式化) や information seeking process (情報検索プロセス) のように search にも「探索」の訳語を当てた場合もある。

---

### 注

1) IFLA 図書館参照モデル：書誌情報の概念モデル / Pat Riva, Patrick Le Bœuf, Maja Žumer 著；訳者代表：和中幹雄，古川肇，樹村房，2019.12. 104p.

2) 書誌レコードの機能要件：IFLA 書誌レコード機能要件研究グループ最終報告：IFLA 目録部会常任委員会承認 / 和中幹雄，古川肇，永田治樹訳。-- 東京：日本図書館協会，2004.3. -- 121p.

<https://www.ifla.org/files/assets/cataloguing/frbr/frbr-ja.pdf>

3) FRAD 典拠データの機能要件：概念モデル / 国立国会図書館収集書誌部訳，2012.

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9454265>

FRSAD 山本昭，水野資子訳. 主題典拠データの機能要件 概念モデル (仮訳) .

TP&D フォーラムシリーズ：整理技術・情報管理等研究論集. 2014, (23), p. 64-96.

ICP 国際目録原則覚書 2016 年版 (2017 年改訂) / IFLA 目録分科会，国際目録規則に関する

IFLA 専門家会議；国立国会図書館収集書誌部訳. 2018.3.

[https://www.ndl.go.jp/jp/data/basic\\_policy/international/pdf/icp\\_2016-jp.pdf](https://www.ndl.go.jp/jp/data/basic_policy/international/pdf/icp_2016-jp.pdf)

(わなか みきお)

2021 年 4 月 23 日受理